

会長挨拶

～研究発表主題「子どもが変わる学校飼育動物」に期待して～

宮下英雄

全国学校飼育動物研究会会長を承っております聖徳大学人文学部の宮下英雄でございます。ひとことご挨拶を申し上げます。

本日は、ここお茶の水女子大学を会場として、子ども発達教育研究センターとの共催をいただき第一回目の研究発表大会を開催することができました。これもご協力、ご支援、ご理解をいただきましたお茶の水女子大学の関係各位をはじめ、全国からご参会をいただきました小学校や幼稚園の諸先生方、また、教育行政に携わっておられます皆様方、そして、各自自治体のなかでご活躍をされておられます獣医師の皆様方等々のお陰です。改めて感謝の意を表すところです。

この研究会は、昨年8月29日この会場にて発足いたしました。発足にあたり、多くの識者から研究会への期待をこめられたメッセージを沢山いただきました。この研究会の方向性、価値付けと解釈することができます。

そのいくつかをご紹介しますと

- (1) 昔から、子どもたちは生き物が大好きです。学校の帰りに子犬や子猫を連れてきて、両親に内緒で飼おうとして叱られた経験を語られ、「今、一度、真剣に、子どもは生き物が大好き」ということを考える時であると強調されています。
- (2) 子どもの心身共に健康な成長を願うとともに動物を愛護し、動物の健康な飼育を推進することを願う人々の総意であるとし、子どもと動物が共存できる社会づくりの必要性を語られています。
- (3) 今まで、この研究会と同様の趣旨を掲げた研究団体がなかったことが不思議にさえ感じます。学校で日々実践されている教育活動にとって飼育動物の新しい可能性を導き出し、その累積を期待しています。
- (4) 学校の教師と獣医師、専門の研究者が集い、情報交換する場が求められています。また、飼育の教育的意義をはっきりさせ、学校での実践の事例と、実証的な検証をすることの大切さを語られています。

等々、貴重なご意見として、これからのこの研究会の推進に役立てていかなければならないと強く決心しているところです。

さて、今回の研究発表大会テーマは「子どもが変わる学校飼育動物」と設定いたしました。

学校を中心とした教育現場においては、「〇〇が変われば、△△が変わる」という表現が良く使われます。皆さんのご記憶には、「校長が変われば学校が変わる」という文言があるのではないかと思います。

校長が変われば学校が変わる。この意味背景には、校長が変われば、教員が変わる。教員が変われば、授業が変わる。授業が変われば、子どもが変わる。とい



う意味内容が含まれています。

このことと関連して、「子どもが変わる学校飼育動物」は、学校飼育動物とのかかわり、触れ合いによって子どもが変わるという期待が込められています。子どもの何が変わる、子どもがどのように変わるのかについては、午前中のご発表の中で、様々な側面から、子どもの姿の変わりから、その成果を発表していただきました。

ご発表の中で、どなたも触れられていますが、確かに、教育の目的は、豊かな人間形成であり、生きる力の育成であると述べられています。そこには、教育の不易の部分としての、知育、徳育、体育の形成が含まれています。学校飼育動物を介在して、知・徳・体のバランスの取れた子どもの育成に寄与できることと確信しています。

現在、子どもの学力をめぐって諸外国との比較調査の結果が公表され、多様な論議がかわされています。OECD・PISA、IEA・TIMSSの調査結果、更には、教育課程の実施状況調査結果につきましては、大きく新聞等で報道され、その対応策として知育の部分のみが強調され一人歩きしているような感がありますが、一昨年の中央教育審議会の答申の中で、「社会が、どういことを学校に求めているか」ということにつきましては、保護者・教員が共通して「友達をつくったり、自分の回りの人々と仲良く付き合ったりするなど、社会の一員として必要な幅広い能力」の必要性を84%の方々が回答をしています。

私はこれらの課題に解決していく有効な分野は学校飼育動物とのかかわりであり、獣医師の皆さん方との連携による教育活動の推進の成果にあると強く考えます。

このあと引き続き開催されます基調講演、シンポジウム、総合討論、並びにご講評のなかで、この課題の解決の方向性を見出ししていくことが「子どもが変わる学校飼育動物」のテーマに即することと考えます。

(聖徳大学人文学部児童学科教授)